

第 35 回雲南懇話会

遊牧、移牧、定牧—モンゴル、チベット、ヒマラヤ、アンデスのフィールドから—

参考文献「遊牧・移牧・定牧—モンゴル、ヒマラヤ、チベット、アンデスのフィールドから」(ナカニシヤ出版 2014)

放送大学教授 稲村哲也

1 牧畜に関する比較検討

農耕が不可能な環境—寒冷地、高地、乾燥地—に、家畜を飼うことで適応し、持続的な生活を送る人々(牧畜民)について、いくつかの地域をとりあげ、「移動」に焦点を当てて比較する。

遊牧 (Nomadic pastoralism) : 水平に、比較的自由的な、季節移動を行う: モンゴル、チベット

移牧 (Pastoral transhumance) : (異なる生態系の間で) 垂直に、規則的な、季節移動を行う: ヒマラヤ、チベット

定牧 (Sedentary pastoralism) : (同じ生態系の中で) 一年中一定の範囲内で家畜を放牧する: アンデス

(1) 遊牧: モンゴル・ゴビ地域 (乾燥地: 標高 1000m)

- ・混合牧畜 (ウマ、ウシ、ラクダ、ヤギ、ヒツジ)
- ・四季を通じて移動する。正確には、現在は、冬春は寒さを避けるため固定畜舎を利用し、夏から秋にかけて比較的自由的な移動をする。雨が少ない夏には、よい草地を求めて長距離の移動を行う。
- ・数家族が一緒にゲルをはり、ホト・アイル (共住集団) を構成する。
- ・夏はミルク製品 (白い食べ物)、冬は肉 (赤い食べ物) が重要



ラクダの母仔 (標高 1000m)

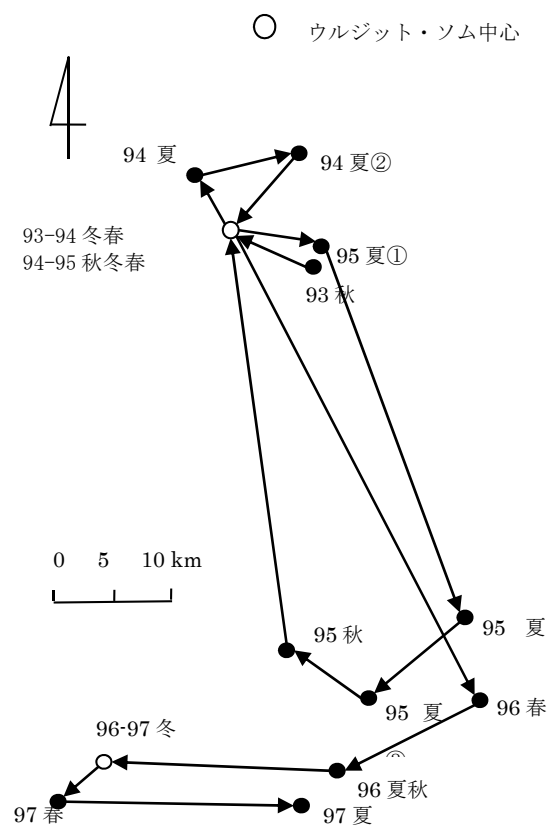


図 1 ドンドゴビ県の家族の季節移動の例

(2) 遊牧と狩猟：モンゴル北部トゥバ民族
 (タイガ地域：標高 1800~2400m)

- ・トナカイ遊牧と森の狩猟(クマ、クロテンなど)
- ・夏は高地の涼しい氷食谷に集まり、他の季節は「低地」の森を移動する：遊牧(水平的な移動)とともに標高差と異なる生態系を利用



トナカイの搾乳(標高 2300m、北緯 51 度)

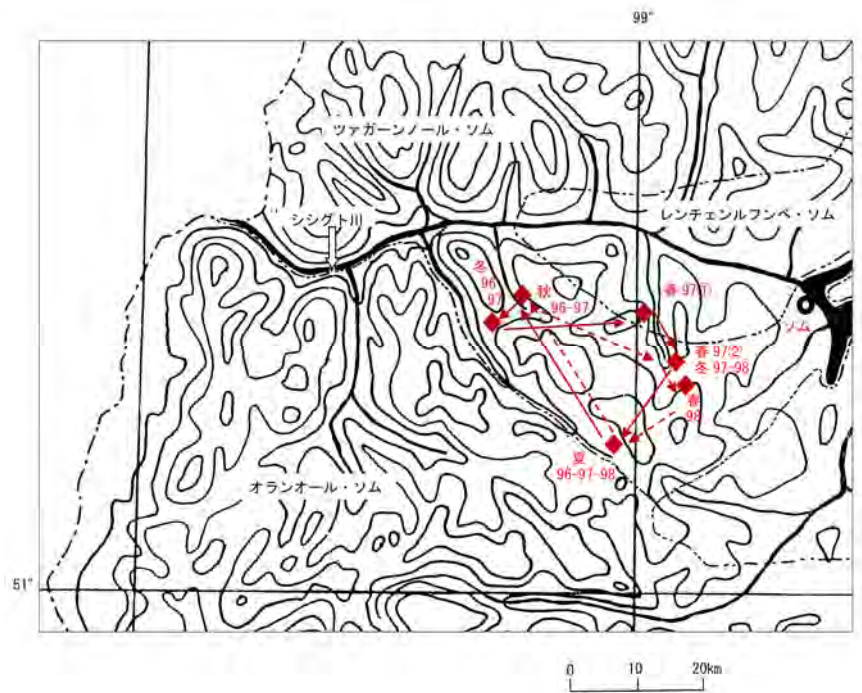


図 2 フブスグル県のトナカイ遊牧の季節移動の例

(3) 遊牧：インド・ラダック地方 チャンタン高原

- ・テントに居住し、高原でヤクの遊牧(標高 4600~4900m)
- ・ミクロな標高差も利用
- ・遊牧だが移動ルートが固定：自由な移動とはいえない
- ・以前は、チベット高原や峡谷部農村地域と長距離の交易
 パシュミナ・ヤギ毛、バターを生産、チベット高原から塩を手に入れ農村で大麦と交換

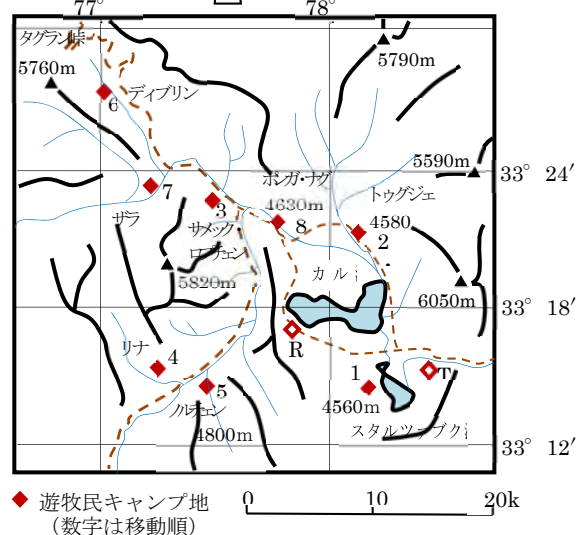
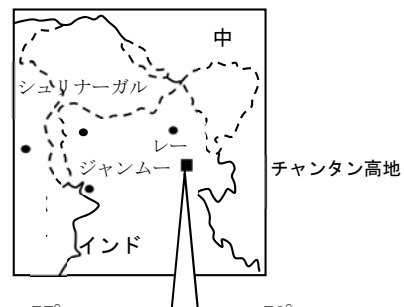


図 3 ラダック、チャンタン高原の遊牧民の移動



ヤクの季節移動(標高 4800m、北緯 33 度)

(4) ヒマラヤの移牧：ネパール、シェルパ民族

- ・オオムギ、ソバなどを栽培、近年はジャガイモが多い：農民
- ・住民の一部は家畜群として、ヤクとゾモ（ヤクと牛のハイブリッド）の移牧（標高 2500～4500）：農牧民
- ・谷に沿って規則的上下移動：異なる生態系—森（2500～4000m）と氷食谷（標高 4000m以上）を利用
- ・父系クラン（外婚制）、谷沿いに点在するクランの土地を利用



ゾモ（雌ヤク）の搾乳（標高 4300m、北緯 27 度）

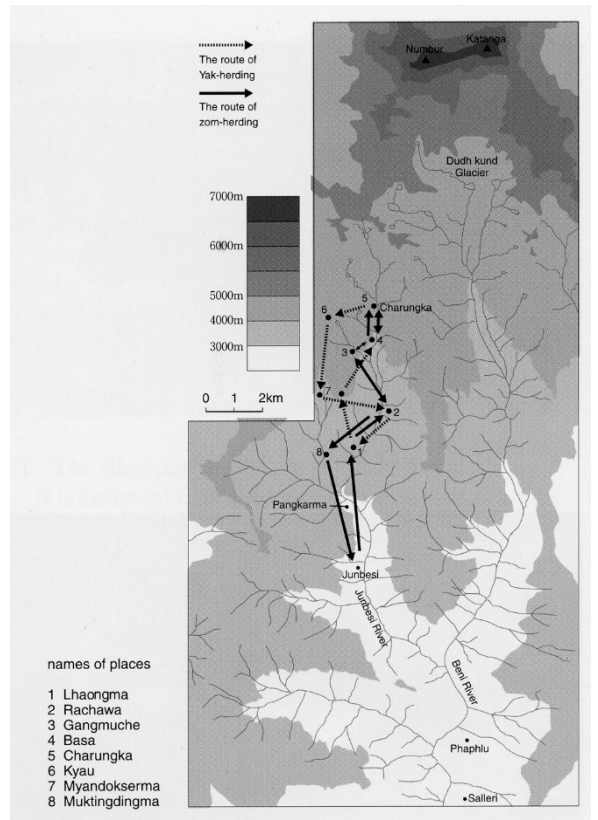
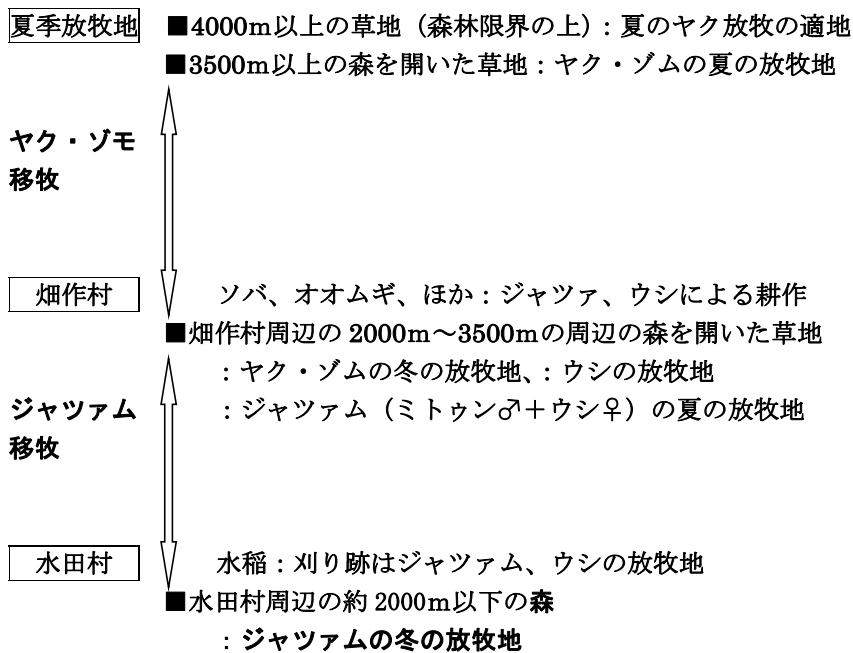


図 4 シェルパの農牧民によるヤクとゾモの移動

(5) ヒマラヤの移牧：ブータン

- ・地域によって、ヤク・ゾモの移牧とともにジャツァム（ミタンと牛のハイブリッド）の移牧が行われている。
- ・農牧複合と専門の移牧がある。



ヤク（4500～3000m）



ジャツァム（3000～1500m）

図 5 ブータン、ブムタンの二重（ヤク・ゾモ&ジャツァム）の移牧

(6) 定牧：ペルー・アンデス、ケチュア民族（アレキパ県）

・リャマとアルパカの牧畜（標高 4500m前後）の
高原で一年中放牧：定牧

〔要因〕

緯度が低いため気温の年較差が小さい。

高原特有の湿原をもつ

・搾乳をしない。

農耕との関係が強い



湿原でのアルパカ放牧（標高 4500m、南緯 12 度）

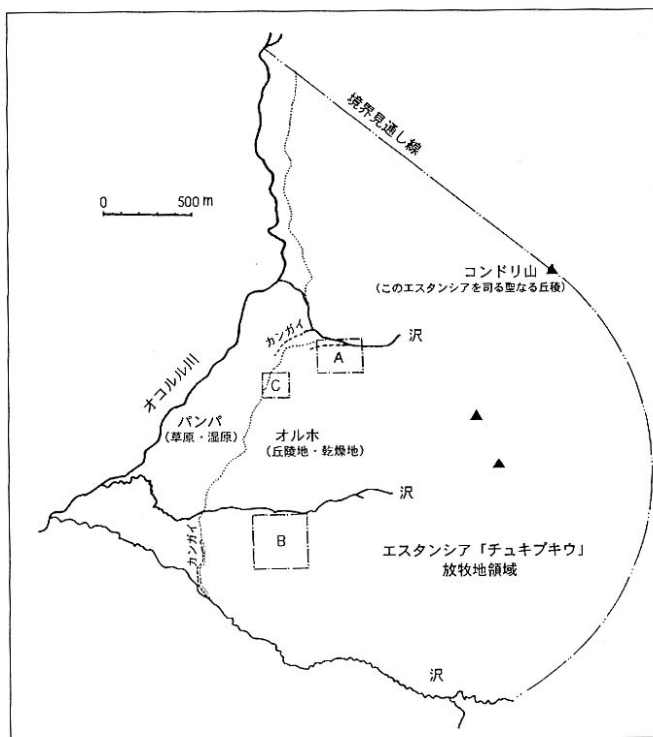


図 6 エスタンシア領域実測図

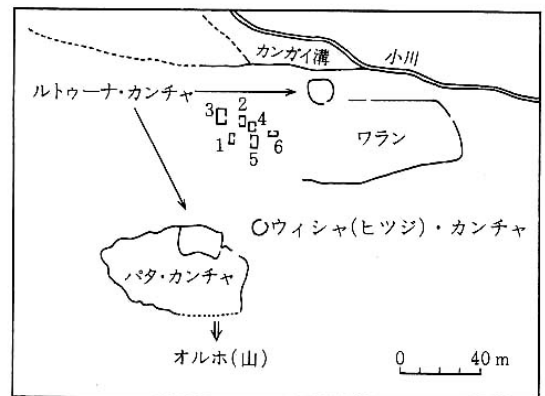


図 6A (上) 主居住地

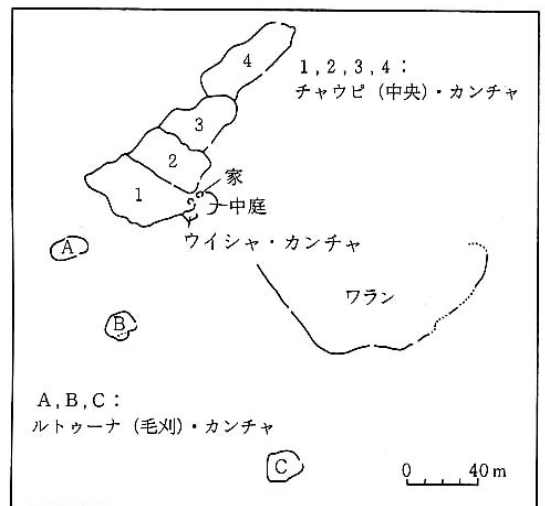


図 6B (下) 副居住地

*AとBの間で移動するが、拡大家族の放牧領域内でのミクロな移動
(雨季の対策を目的とする移動であり、標高差はない→移牧ではない)